

漕艇部部歌

— 春三月の

(茨戸の歌)

— (昭和三十年)

木原慎一君 作歌・作曲

一

春三月の蝦夷島
長き眠りにとぎされし
茨戸河畔の雪とけて
とく待ちわびし水の子の
喜び笑ふ声すなり

二

岸の辺近く郭公の
啼く音うれしく聞き初めね
漕ぎ来し方を眺むれば
霞にとける野の煙
水郷の春の昼閑か

三

岩燕は去りて風熱き
夏たけなはの候となる
運河一発引き抜きて
しばし憩はむ土手の上
羊も寄りて草を食む

四

いつか炎暑の日はゆきて
光のどけき茨戸河
青き水の面に波立たず
こよなき季節訪れぬ
心ゆくまで漕がむかな

五

手稲は紅く空高く
秋の気深くなりにけり
かい先近くぼらはねて
夕練習終へるころ
陽はくれないに没したり

六

河霧深くたちこめて
霜結ぶ朝艇出す
みぎわの木々は枯れはてて
冬もま近となりぬれば
惜しみて漕がむ残る日々

七

北風ささび雪は舞ひ
ふぶきに暮れる冬の河
今日ぞわれらが漕ぎ納め
いざわが友よ胸深く
また来む年の幸思へ